

## 仲間の「いのち」太らせた三〇年間の軌跡



マイナスからの出発——連載をはじめるにあたって



『みんなのねがい』読者のみなさん、こんにちは。今月号から来年三月号までの一年間、「自立支援法下での障害者の暮らし」を念頭に、私のこれまでの体験の中で感じたこと、お伝えしておきたいことを書き留め、お届けすることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

### 団塊世代の私——汗と油の一六歳

私は終戦直後の一九四七（昭和二二）年一月に、滋賀県東近江市で大工の息子とし

て生まれました。大工にさせたいという父親の考えにはそむき、中学校を卒業すると職業訓練校の機械科に入学。即戦力になる旋盤や設計などの技術を一年間で叩き込まれて、大都会大阪の大手製鉄会社に集団就職したのです。

当時は日本が高度経済成長の波に乗り出した時期でもあり、中学校卒業生は安い賃金でたつぷりと働く「金の卵」と言われた時代でした。まさに団塊の世代の一人です。汗と油に汚れる一六歳の私の毎日は残業

の連続でした。一日の仕事が終わると乾いた作業服の汗は、白い塩が波状となって浮かび上がっていました。会社の寮ではその作業服を石鹼をつけたタワシでゴシゴシと洗い、一〇円玉を入れないと動かない洗濯機を相手に悪戦苦闘する日々をすごしました。要するに、働けどどこまでも搾り取られた時代が、私の人生のはじまりだったのです。

やがて少しは目覚めたのか、一七歳にして疲れきった身体を夜間高校に運んだので

した。四年間の夜学を終え、卒業するころには学生は半減していましたが、当時の友だちとは今も付き合っています。卒業と同時にこれからもこんなつらい労働者としての生き方をするくらいなら、いつそのこ

と、親のいない可哀想な子どもたちが暮らしている養護施設で働く方がいいような気がして、会社を辞め、施設の指導員として再出発したのでした。でも、可哀想な子どもと思っていたのは大きなまちがいでした。

ある日、中学三年の少年が小さな子どもを使い走りさせていることに腹を立てた私は、その少年に手を出してしまったのです。そのことが元で、反抗してきた少年と私は殴り合いのケンカをしてしまいました。施設の子どもは可哀想なのではなく、みんな同じ人間だったことを教えられました。こんなことではダメだと気がついた私は、三年間勤めた施設を辞め、遅まきながら二四歳にして日本福祉大学の夜間部に入学し、本格的に福祉の勉強をすることにしました。生活費に加え当然学費も必要になります。当時のスポーツ新聞には運転手募集記事がやたらと多く、即お金にもなるの

で長距離も含むトラック運転手として就職し、働きながら学びました。結構これもきつかったなーと当時を思い出します。

### 仲間たちとの出会い

大学に在学しているときに、日本で最初の共同作業所である名古屋のゆたか作業所に足を運んだことで、はじめて知的障害の仲間たちと出会いました。障害のあるトコちゃん、せつちゃん、春子さん、チーちゃん、あきお君、堀君など、今も一人ひとり



が、そしてその人柄までもがはつきりと私の記憶に焼きついています。

堀君が私の手を引っ張って、「立岡さん、ここに座って……これ……しゃーせ」と名古屋弁丸出しで仕事をするように催促するので。当時ゆたか作業所ではラジオなど、部品の組み立て作業をしていました。機械が専門の私ですから、こんなもの簡単と思つてやるのですが、仲間たちは「立岡さん、どえりやーへたやなー」と言いながらしっかりと教えてくれるのでした。仕事に自信をもった彼らの眼はキラキラ輝いて見えました。また、ゆたか作業所では仕事を終えてからの反省会などでも、仲間たちが助け合いながら、一人ひとりが自分を自分らしく表現し、みんなが一人ひとりを認め合うという見事な自治会運営をしていました。

さらに、この職員さんたちが、働くことを単に生計のための手段としてではなく、人間的な生活、発達の権利の保障につながるものとしてとらえようとしていることを知ったとき、「私の探していたのはこれだっ！」と直感しました。それまで引きずっていた迷いはいっぺんに吹っ飛びました。